

森の妖姫

小川未明

青空文庫

何の時代からであるか、信濃の国の或る山中に、一つの湖水がある。名を琵琶池といつて神代ながらの青々とした水は声なく静かに神秘の色をたたえて、木影は水面の暗きまに繁りに繁り合っている。人も稀にしか行かない処で、春、夏、秋、冬、鳥の啼声と、白雲の悠々と流れ行く姿を見るばかり。

偶々道に迷うて、旅人のこの辺まで踏み込んで、この物怖しの池の畔に来て見ると、

こは不思議なことに年若い女が悄然と佇んで、自分の姿をその白銀のような水面に映してさめざめと泣いているのを見る。旅人は斯様な山中にどうして斯様な女がいるかと怪しみながら傍へ行こうとすると、葛や、茨に衣のからまつて、容易に行くことが出来ず、声を上げて女を呼ぶとその声音が不思議に妙な反響を木精にたてて、静かな死せるような水面がゆらゆらと揺ぐ。ぞつとして踵を返して、一生懸命に野を横ぎり、又もや村里の方を指して程少し来ると思う時分に百万の軍勢が閥を造つて、枯野を駆けるがように轟と風やら、雨の物音が耳許を襲う。この時には麓の村々には大雷雨があつて、物を知れる年寄などは又誰れか池で身投をして死んだな、と噂をするのである。而してその旅人は何処へ行つたやら再び姿を見ぬ。

昔、昔、ずっと昔に或る忠義な武士があつて主君の非行を諫言し奉つた。すると癪持の君は真二つに斬り下んと刀の束に手をかけたのを、最愛の妾が傍から止めたので、命だけは賜わつて、国外に追放の身となつたのである。その実妾は却つて武士を愛していたので、臆て自分もその武士の後を慕うて、一夜暗にまぎれて城を逃げ出た。而して漸く追い付いて自分の意の中のあるたけを語つた。武士は妾の請に少なからず当惑したけれど、もはや何れにしても命のない女の身を可哀そうに思つて、意を決して二人は手に手を取り合つて、秋将さに深き信濃の山路に逃げのびたのである。而して三年この池の畔に二人は安樂に暮した。しかるに一日夫は狩獵に出かけた限り家に帰えらなかつた。妻は案じて野の末を隈なく探して見ると、何者に殺されたか、切り捨てられた屍を見出したのである。やがてそれは君の追手の者に殺されたということが分つた。何時しかその年も暮れてしまう。明る年の春、うす紫の藤の花が咲く時分に、ついにこの憐むべき女は狂わしの身となつて、人を怨み世を憤つて、遂にこの池の中に身を沈めて、妖霊に化したのである。道行く旅人、野に分け入る百姓等は相戒めて、決して琵琶池の辺りに近かないという。

もはや春もくれて、雲白き南信濃路に夏の眺めを賞せんものと、青年画家の一人は画筆

を携たずさえて、この深山路みやまじに迷いに迷い入った。緑滴したたるばかりの森影に、この妖姫ようきの住める美
 しの池は漣さざなみを立てて、寂じやくとして声なき自然の万象をこの鏡きやう中ちゆうに映じている。青年は池
 の畔りに腰を下して、名もなき花の、咲き満つる、青草の上にカンバスを構えた。

都を立出でて、既に六十日、今や盛夏を告げ顔なる、蟬ひぐらしや、蝸むこうの声などが聞える。それ
 にしてもこの艶つやつや々々しい池の畔の草木の緑葉の眺めかな。赤々として熱そうな、日入いりひの影
 が彼方むこうの松林に照りつけると、蝸むこうの声は深山の溪間たにまで鳴くのである。もはや帰るべき時は
 来きたった。

やおら青年は起たち上らんとする時、悲しき、嬉しき歌の声は杜もりの彼方かなたに聞える。彼は耳
 を澄まして、睨じつと彼方を見詰めた。空色の衣物きものに緋の袴を着て、房々ふさふさとした黒髪を垂れ
 たる美女は梢の繁みを払って、我が方かたを差し覗のぞいているように思われる。はつとして青年
 は心臓の血潮を躍おどらすと、もはやその姿は歌と共に消え失せてしまった。

次の日も青年は、写生に出掛けた。而そしてその歌をきいた。やはり美しい姿は半ば木の
 葉に隠れて此方こなたを覗く様子は昨日と異ならない。この度ばかりは……と躊躇ためらう間に早や何
 処ずくへか消えてしまう。その夜は寝てもただ一目見し森の少女おとめの恋しくも、夢に見え、幻と
 なりて時々目に浮ぶのである。何処の者ぞ……名は何と云うぞ。してその姿の怪くしくも華は

奢^でやかに装いつるかな。

白雲は折々、湖面を渡った。風は折々樹の葉を鳴らした。人も来ない、寂しい山中のこの辺の景色、永劫の自然を思い、人生の須臾^{しゅゆ}なるを痛んで、青年は一幅の画中^{とこしな}に長えにうら若き彼の少女^かを書き入れんと眸^{ひとみ}を森の彼方に送る刹那^{せつな}、いつもの悲しき、嬉しき歌の聲がきこえた。気のせいかな何となくいつもより悲しい。

うつとりと見れば、若者の恋しい。

昔ながらの、青く、動かぬ水に映つる。

絵筆とる、指の白くて、

その面形^{おもかげ}の、何とのう、恋しの夫^{つま}に似たり。

紅き野薔薇の花を摘んで、唇にあてれば、胸の血潮が沸いて、耳朶^{みみたぶ}が熱する。

よそよそと吹く夕風、怨^{うら}みもとけて酔^えい心地となった。若^{わか}やかな、恋をば又してみようか。

月の上^{ころお}る頃い、水辺の森に来て、琴を鳴らし、ああ、頸^{くび}に掛けたる宝^{たま}玉を解いて、青^わかもの^{ちぎり}年に契^{ちぎり}を結ぼう。

あれ、彼処あしこに我が兄子せこの、狩いの扮装でたちをして野原に馳はせて行きやる。あれ、馬から落ちられた。

ああ、血潮を浴びて、白羽の矢が額いとおを射貫いとおしたわいのう。

水に映る白雲の、いつしか消えてしまった。西の夕焼あかあかと、木々の葉風の怪くしく光る。

許してたもれ！ 許してたもれ！ 暴風雨あらしよ疾とく天あまつ日の光りを掩おおえかしと魔女は森の中に駆け込んだ。天日てんじつ遽にわかに掻き曇くもつて、湖面の水黒く渦巻き返える。疾風は林かすを掠かすめ、森を掠かすめ、野を掠かすめ、雲乱れて飛び、蝸の泣声止んで、寂せき寞ばくとして天地は静まりかえつた。青年画家は麓を志して道をいそいだが、後方うしろの山を越えて、千軍万馬の襲てつい来る鉄蹄ていの響いきや、馬の嘶いななきをきいた。忽たちまち雨やら、風の物音が耳みみ許もとを襲うう。それぎり青年画家の行衛ゆくえは知れなくなってしまうた。その夜は近隣の村々に黒風こくふう、白雨びやくうは猛たけりに猛り狂いに狂った。その明あくる日は、大空は拭ぬぐうたように晴れ渡つて、朝日影が麓の家々の白

壁に落ちる、熱さは一ひとしお入加わって、蜩の声は汗をしぼるがように、野や、森や、並木や、雑木林に聞かれた。その後暫しばらく、魔女は姿を見せなくなった。今でも物静かなる琵琶池には画筆や、カンバスなどが浮いている時があるが、人が近づくと沈んでしまうそうなの。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 小川未明集 幽霊船」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年8月10日第1刷発行

2010（平成22）年5月25日第2刷発行

底本の親本：「愁人」隆文館

1907（明治40）年6月25日発行

初出：「趣味」

1906（明治39）年7月号

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2019年3月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

森の妖姫

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>